

(続紙1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	桐原 翠
論文題目	現代イスラーム世界におけるハラール産業の発展 —マレーシアの国際的イニシアティブとハラール認証制度の越境化—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近年、イスラーム世界の内外で急成長を続けているハラール産業と呼ばれるムスリム向け製造・サービス業に注目し、それを支えるイスラーム世界の現代的変容を追いながら、ハラール産業の世界的拠点であるマレーシアを事例として取り上げ、同国における沿革と動態、および国際的役割を明らかにすることをめざした研究である。</p> <p>本論文は、4章から成り、序論と結論が付されている。</p> <p>第1章「現代世界におけるイスラーム法の規範と展開—ムスリムの生存基盤としての食—」では、現代におけるハラール産業の勃興に大きく関わるイスラーム復興運動に注目し、ハラール産業が登場した歴史的背景が考察されている。その上で、ハラール産業の発展に大きく寄与したムスリム移民／ディアスポラの役割や、ハラールに関するイスラーム法の現代的革新に貢献したムスリム知識人であるムハンマド・ハーシム・カマーリーの法解釈についての分析が行われている。</p> <p>第2章「多民族国家マレーシアの成立とイスラームイニシアティブの獲得」では、マレーシアの現代史を描きながら、多民族国家としての経験が同国のハラール産業発展にどのような影響を与えてきたのかについて考察されている。また、同国の歴代政権が打ち出してきたイスラーム的発展戦略とハラール産業との関係性についても分析が行われ、発展戦略とハラール産業が、現代イスラーム世界における同国のイニシアティブの獲得のための車の両輪になっているだけでなく、全世界のムスリムの生存基盤強化への貢献も視野に入っていることが明らかにされている。</p> <p>第3章「マレーシアにおけるハラール規定の明文化とその制度化」では、マレーシアのハラール産業の発展について、同国が世界の先頭を切って整備を進めてきたハラール認証制度の形成過程の分析と、ムスリムの生活空間におけるハラール規範の浸透の2つの側面から分析が行われている。そこでは、現在のマレーシアにおけるハラール産業の発展は、単にハラール認証制度の整備だけでは説明することができず、認証制度を超えたハラール規範の日常生活への浸透が大きく貢献したことが明らかにされている。</p> <p>第4章「国際的主導権を目指すマレーシアの政策と戦略」では、ハラール産業の国際ハブをめざすマレーシアの国家戦略の実効性と意義を理解するために、アブドゥッラ・バダウィ政権期のハラール産業戦略に注目し、その国際的な影響をマレーシア国外のハラール産業の動向の調査にもとづいて考察している。トルコとドバイのハラール</p>			

ル見本市の現地調査からは、ハラール産業の国際的競合の中でもマレーシアのハラール産業の存在感は無視できないレベルに達しており、マレーシアを「グローバル・ハラール・ムーブメント」の先導役として位置づけることができると結論づけている。

結論では、論文全体をまとめ、現在のハラール産業の発展は、伝統的なイスラーム世界から現代イスラーム世界を架橋し、かつイスラーム世界とグローバル社会の共存を具現化した存在であると述べ、21世紀型のイスラーム文明システムの先進事例としての意義もあると総括されている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、イスラーム世界論の一環として、現代イスラーム世界における新たな実践領域であるハラール産業に着目し、マレーシアにおける取り組みを具体的事例として、その実態を綿密な臨地研究によって解明し、その実践の意義をイスラーム文明論の視角から評価したものである。

本論文の内容に即した近年のイスラーム文明論における主要な論点は3つある。第1は、イスラーム知の現代的越境性に関する議論である。イスラーム世界では、その形成期から現在に至るまで、様々な知が地域の枠を超え広範に伝播・融合し、イスラーム知のグローバル・ネットワークを形作ってきた。移動手段が高度に発達し、サイバー空間が登場した現在、そうしたネットワークの現代的再構築や新たに登場してきたイスラーム知の普遍的可能性に関する研究がさかんに行われ始めている。

第2は、現代イスラーム文明の社会経済的役割に関する議論である。イスラーム復興の浸透によって、現代世界では政治社会経済のあらゆる領域を網羅する包括的なイスラーム文明システムが再構築されつつある。しかし、既存研究の多くは、その政治的側面に注目したものであり、ムスリムの日常生活や経済活動におけるイスラーム復興の動態やイスラーム文明論的意義を考察した研究は、その実態の重要性と比べてきわめて少ない。

第3は、イスラーム文明における東南アジアの役割に関する議論である。既存研究の多くは、イスラームの様々な知を中東アラブ世界から受容する地域として東南アジアを捉えてきた。しかし、21世紀に入り、東南アジアがイスラーム文明の将来像を積極的に発信するようになってきており、こうした実態にもとづいた東南アジアのイスラーム像の再検討が急がれている。

本論文の価値は、こうした近年のイスラーム文明論で交わされている議論を精査した上で、マレーシアにおけるハラール産業の取り組みという具体的事例の考察によって、イスラーム文明論の新たな方向性を指し示した点にある。

本論文の学術的な意義は、以下の3点にまとめることができる。

第1は、イスラーム知を結ぶネットワークの現代的再構築の文脈において、その動向に巧みに対応し越境的イスラーム知識人としての地位を確立しているハーシム・カマーリーに注目し、同氏のハラール産業の発展への知的貢献を明らかにした点である。自らがアフガニスタン・ディアスポラであるカマーリーは、イスラーム世界各地のみならず欧米でも長期の学究経験があり、現代イスラーム中道思想の広範な普及に尽力してきた。本論文では、その思想の実践への応用事例として、ハラール製品・サービスが位置づけられており、思想（イスラーム思想）および実践（ハラール）のそれぞれのレベルにおけるグローバルな展開がどのように共振・同期しているのかを原典研究と本人への聞き取り調査をもとに明快に描くことに成功している。思想および実践のそれぞれに特化したグローバル・

イスラーム・ネットワークの研究は多く行われているが、両者の関係性およびダイナミズムに注目したという点において本論文の貢献は非常に大きい。

第2は、本論文の主たる対象であるハラール産業を、現代イスラーム文明システムを構成する重要な社会経済的要素に位置づけた点である。従来のハラール産業に関する研究では、産業の経済効果に関する実証研究やハラール認証の基準を科学的に明示化する実用科学的研究が大半を占めている。これに対して本論文は、ハラール産業を伝統的なイスラーム世界から現代イスラーム世界を架橋し、かつイスラーム世界とグローバル社会の共存を具現化した存在であると捉え、21世紀型のイスラーム文明システムの先進事例と位置づけており、実用志向の先行研究とは一線を画している。一過性のハラール産業ブームに踊らされない地に足のついた持続可能な研究を我慢強く志向し、かつ、長期的視野でイスラーム文明の社会経済面からの普遍的可能性を追究する本論文は、その研究姿勢も含めてきわめて貴重な成果である。

第3は、東南アジアのイスラーム像の再検討という研究潮流の文脈において、マレーシアの役割と意義を再評価した点である。マレーシアは、1990年代から国家の強力なイニシアティブによってイスラーム経済（イスラーム金融、ハラール産業）の振興を軸とした新しいイスラーム文明システムの構築を提唱してきた。しかし、既存研究では、イスラーム経済の同国の経済発展への寄与に主たる注目が集まり、同国の取り組みのイスラーム文明論的意義についてはほとんど顧みられてこなかった。これに対して本論文は、ハラール産業の振興に取り組むマレーシアのイスラーム文明論的意義の解明に正面から取り組み、単なる経済成長の実現ではなく、ハラール産業を足がかりにしてアジア・イスラーム型の持続的生存基盤モデルを提起することをマレーシアがめざしていることを明らかにしている。換言すれば、次世代の持続的地球社会システムの1つの有力な参照軸をイスラーム文明から提供することをマレーシアは企図しているのであり、このようなイスラーム文明論の普遍的意義を同国の取り組みから見出した本論文の主張はきわめて独創的である。

本論文は、以上のようにイスラーム世界論とイスラーム文明論に大きな貢献をなすのみならず、マレーシア地域研究や持続型生存基盤論にとっても貴重な貢献をなすものと考えられる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認められた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。